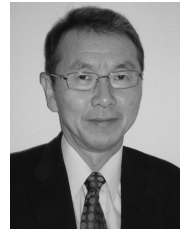


『ジーニアス総合英語』を授業に生かし、表現力を伸ばす指導法

山岡憲史



■文法知識とコミュニケーション

文法の知識はコミュニケーション能力の育成に欠かせないものであることに異議を唱える人はいないでしょう。しかし、私たち英語教師は形式(form)と意味(meaning)の定着に力を入れすぎ、生徒たちに文法規則の暗記と演習ばかりを強いてきたように思われます。その結果、生徒たちは文法問題には対処できても、実際に文法を使って表現するという力が、悲しいほどついていないのが現状です。

しかし、現行の学習指導要領が謳うように、「文法はコミュニケーションを支えるもの」であり、文法指導は常にコミュニケーションを意識したものでなければなりません。形式の習得はもちろん必須ですが、今後の文法指導は、学習した形式をどのような場面(situation)でいかに使うのか(使い方:usage)という、実際のコミュニケーションを見据えたものにすることが肝要と思われるます。

■『ジーニアス総合英語』のめざすもの

今回、9名の編集委員が渾身の力を込めて上梓した『ジーニアス総合英語』は、文法の形式と意味にわかりやすくかつ詳しい解説を施しただけでなく、文法形式が表す表現がどのような機能(function)を持ち、どのような場合に使われるのかについても丁寧な説明を行っています。

例) 未来進行形を使った表現 (p. 82)

(2) We **will be landing** at Haneda Airport shortly. (訳省略)

未来進行形にはもう1つの用法があり、(2)のよ

うに、「～することになっている」という意味を表す。主語の意志とは関係なく、成り行きや状況からして当然そうすることになるという予定を表す。

[もっとくわしく] 未来進行形は、意志の意味合いを含まない。そのため、相手の意志を尋ねることが直接的すぎる場合は、未来進行形を使うことで、間接的で丁寧な表現にすることができる。

When **will you be visiting** us again?

次の訪問はいつ頃になりますか。

上例の下線部が機能であり、どのような場合に使われるのかの説明ですが、『ジーニアス総合英語』では、文法が使われる場面や機能とその使い方について、このような細心の配慮をしており、「英語表現」の教科書の例文と最小限の解説では補いきれない解説に命を吹き込むことができます。似た表現や語の意味の違いにも詳しく言及していますので、例えば「可能性」を表すcanとmayの使い分けができるように、『ジーニアス総合英語』p. 121を参照させます。

[もっとくわしく] canが「一般的な可能性」(出来事が不定期に何回か起こる可能性)を表すのに対して、mayは「具体的な可能性」(出来事が特定の1回だけ起こる可能性)を表す。

① Mountain climbing **can** be dangerous in summer, too. (訳省略)

② Mountain climbing **may** be dangerous today. (訳省略)

①は、夏の登山の危険性について一般的に述べている場合で、②は今日登山をしようと考えている人に登山の危険性を説明している場合である。

■『ジーニアス英和辞典 第5版』との連動性

このように、文法形式の持つ機能や実際の使い方に鋭く切り込むことを可能にしたのは、『ジーニアス英和辞典 第5版』(以下G5)とのコラボレーションの賜物です。電子辞書の搭載率で圧倒的なシェアを誇り、語法の詳しさに定評のあるG5ですが、一般的な高校生にはややハイレベルで、意味を調べることで以上の活用があまりできていないケースもあるかもしれません。

『ジーニアス総合英語』は、G5に盛り込まれている文法形式や語句の使い方のエッセンスを高校生が実際にコミュニケーションに役立てることができるように抽出し、例文も極力同じものを取り上げています。例えばp. 612には、Why don't you **take a look** at this book? という例文について「『この本をちょっと見て』という意味を表し、相手にあまり負担感を感じさせないような誘いの表現になる。」という記述がG5のlook④①内例文 Could you take a *look* at this draft? の注記《◆ Could you read this draft? では、「間違っているかもしれないので注意して読んでできれば批評してほしい」の意》に通じる解説になっています。

このように、『ジーニアス総合英語』をG5と一緒に参照させ dual sources から学ばせることにより、知識は複眼的でより確かなものとなり、メタ認知力を伸ばすことにもつながるでしょう。

指導例を1つ挙げてみます。

he was so funny that she **couldn't help laughing**. という文の前に来るのにふさわしい文を選ばせます。

- (1) Bill tried to be serious, but
- (2) Bill tried to amuse everyone, and

そして、『ジーニアス総合英語』p. 579およびG5 help の成句を参照させ、cannot help *doing* が「～することが避けられず、自分の行為をコントロールしようと思ってもできない場合に使われる」ことを学ばせます。

■文法を持つ特性と文体への配慮

それぞれの文法形式には、その特性とそれが使われる必然性があります。『ジーニアス総合英語』では、関係代名詞の制限用法を「絞り込む用法」、非制限用法を「つけ足す用法」と説明しています。受動態で行為者を表す by ~ は、「それが必要な場合にのみ置かれる」とし、すでに話題に上っている(旧情報である)代名詞が by 以下に来ることはあまりないことを記しています。分詞構文の例文には、従来 Walking along the street, I met John. のようなものがほとんどでしたが、「あいまいさを残したまま判断を読者に任せる小説などで多く見られます」と解説して、The queen went down the stairs, **waving her hand**. のような、文語体にふさわしい例文を挙げています。このような情報は、表現力を伸ばす指導で極めて重要であるだけでなく、英文を読解させる場合にも参照させるべきだと言えます。

総合英語の参考書を使わせる場合、「35ページから58ページまでを勉強してきなさい。次の時間にテストします。」というような指導がどれほど非効率で生徒の意欲を削ぐかは、多くの先生が身をもって体験しているはずです。最初は網羅主義を捨てて、必要な時にピンポイントで文法に関する有益な情報を refer させる書物として、授業内や家庭学習で使わせてみることをお勧めします。生徒には理解した内容をマーカーでハイライトさせます。(本書に必要以上に色が使われていないのは、生徒に「色をつけさせる」という深謀遠慮からなのです。)次第に自分の色が多くなってくれば、難しいと思っていた文法が身近なものとなり、参考書が親しいものに思えてくるでしょう。そうなれば、生徒が自ら読み進んでいくものです。そのような、生徒の気づきや発見を豊富に散りばめた「コミュニケーションを支える」文法参考書として、『ジーニアス総合英語』は貴重な学習書となることでしょう。

(やまおか けんじ・立命館大学教授)